ひらけゆく希望 ②

約束される数千万円の收入

孤島に描くアシカの恋模様

日本海の宝庫 竹島

竹島の帰属問題もこんどの講和会議で正式に日本領土と認められることになり、六年間、同島への出漁を夢見つづけた県民を喜ばせている。講和後に結ばれる漁業協定で近く同島への出漁も許されるものとみられるが年額数千万円の海産物を約束される竹島だけに県民の喜びもひとしお強い。

同島のアシカ狩りは明治四十四年から昭和十七年まで続き年々アシカ約七十頭を捕え矢野、木下サーカスや各地の動物園に送って来た。最盛期には二、三百頭もとれたことがあるというが戦後空白の六年間は密航船のほかは近寄るものもなかったのでうんと繁殖しているだろうとみられている。同島には年間数百頭が常住し交尾期、出産期には五、六千頭が上陸して島一面を埋め日本海の猟奇の島として知られているがまた海猫の島として名高い。竹島はまたアシカの女護ケ島ともいう。日本海を吹き荒れたシベリヤおろしに代り東南の風の吹く四月末ごろになると朝鮮北海岸からシベリヤ沿海州、樺太、千島と小魚の群れる海流を追って八ケ月にわたる独身生活にまる〳〵とふとり切った雄のアシカ三、四百頭が水温る日本海を渡って恋の竹島にやってくる。これを迎える女護ケ島の雌のアシカは二千頭内外で雄の約五倍、かくて凄まじい恋愛争奪戦が続き血潮の花が咲くという。これで百五、六十貫級の老大獣はいずれも二、三十頭から五十頭の妻、妾を独占し、力たらざる若者は悄然と離れ島に不運をかこつという。これが竹島の生態でもある。

戦前ここはアシカのほかあわび、さざえ十万貫、和布二十万貫、天草一千万貫、かき五万貫、赤なまこ十万貫を産した海の宝庫であった。戦後竹島は六年の空白期間を経て伝説の島に近づいていた。いまその伝説の扉が開かれようとしている。アシカ獲りの棟領格として数年働いた隠岐島五箇村前田峯太郎(六〇)池田和人(四〇)の両氏は次のように語る。

実際物凄い人間とアシカの闘争です。雄の方が大きく一頭五、六十貫、雌の方は三、四十貫ですが我々の生捕ったのに九尺、百五十貫の主のようなものもあった。雄の頭数は少く雌は雄の五倍はいるが雄が出来うる限り多く雌を自由にするというので恋愛闘争が常にあります。アシカは捕まってから三十日から六十日位は頑強に絶食しているがそれでも大丈夫です。他の海産物、魚介類など無尽蔵で全く日本海の宝庫に違いなく一日も早く出漁を再開したいものです。

毎日新聞（大阪本社）島根版（1951年9月6日）島根県立図書館所蔵